

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18320137

研究課題名（和文） オーストラリアの対アジア緊密化に伴う地域変容の研究

研究課題名（英文） Research of the Regional Transformation in Australia Resulting from Closer Relationship with Asian Countries

研究代表者

南出 眞助（MINAMIDE SHINSUKE）

追手門学院大学・国際教養学部・教授

研究者番号：80111904

研究成果の概要：

オーストラリアにおけるアジア諸国の影響を、具体的な地域を事例として検証した。たとえば北部準州のダーウィンでは、ベトナム系住民による新たな第一次産業の動きがあり、また西オーストラリア州のパースでは、インド系の中程度技術労働者の流入が大きな影響をもたらすことが判明した。他の都市との比較調査でも、労働現場におけるアジア化の影響が明白であった。中国製工業製品の流入や、日本の資本参入といったモノとカネの動きだけではなく、ヒトの移動に伴うオーストラリアの地域変容の実態を把握することができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	7,800,000	2,340,000	10,140,000
2007年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2008年度	2,800,000	840,000	3,640,000
年度			
年度			
総計	15,400,000	4,620,000	20,020,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：国際研究者交流、人文地理学、オーストラリア、地域開発、国際労働力移動、労使関係論、対外直接投資、自由貿易協定

1. 研究開始当初の背景

(1)当初の研究計画調書にも記したように、近年におけるオーストラリアとアジア諸国との関係は、単に地理的に近いがゆえの緊密外交・交流という以上に、オーストラリアがアジアの経済圏にどのように組み込まれるのか、あるいは組み込まれずに独自性を保つのかという切迫した状況に至っていた。

(2)オーストラリアにとって、長らくアジア

最大の貿易相手国であった日本の優位は、中国のWTO加入を機に揺らぎ始め、またASEANのリーダー的存在であるインドネシアとの微妙な政治・経済関係は、東ティモール問題、海底ガス油田問題で露見した。さらに一方ではIT産業を新機軸としたインドの急激な台頭もあって、オーストラリアは、アジア諸国との商業貿易のみならず、アジア系資本の参入、アジア系労働者の流入という、モノ・カネ・ヒトの三局面において大きな転換期を迎えていた。

(3)その影響はオーストラリア国内においても、あるいはオーストラリア国民の生活の中にも表れており、中国製の工業製品に圧倒される産業界の停滞から、一時的には反アジア、ネオ・ナショナリズムの勃興といった動きにまで及んでいた。このような社会背景のもとに本研究計画が企図された。

(4)研究背景としては、研究分担者の多くが追手門学院大学オーストラリア研究所に所属しており、長年にわたる海外共同研究の実績があった。オーストラリアのフィールドワークといえば、人類学や社会学の調査に関心が集中しがちであるが、本研究のように、地理学・歴史学・経済学・経営学・生態学等の立場からの多面的に分析を試みる例は、オーストラリア研究所の研究背景を反映したものである。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、オーストラリア対アジア諸国という国家間関係を、連邦政府の外交政策や貿易動向から大局的に俯瞰するのではなく、あくまでオーストラリア国内の地域に投影された諸側面から実証的に明らかにする点にある。

(2)地域変容に関する既往の研究では、オーストラリア東南部の人口稠密地帯であるブリズベン・シドニー・メルボルン等の大都市周辺が対象とされることが多かったが、本研究では、あえて中小規模レベルの都市として、北部準州のダーウィンおよび、西オーストラリア州のパースを共通事例として採択した。上記のようなアジア化の影響が、目に見える形で追跡できるのではないかと考えたからである。

3. 研究の方法

(1)研究分担者全員に共通する調査対象地域として、2006年度はダーウィンを、2007年度はパースを選定した。その他の都市は、各研究分担者の課題に応じて比較調査の対象とすることとした。

(2)各分担課題は、地理学の南出が「水陸交通結節モデル」、経済学の森島が「経済政策・労使関係」、経営学の山中が「対オーストラリア直接投資」、歴史学の重松が「アジア系移民社会」、生物学の西川が「観光開発と生態系」、地理学の筒井が「村落社会構造」、地

理学の金田が「農牧業地域」をそれぞれ担当した。

(3)現地調査に先立ち、関連図書や研究論文の収集を行った。統計資料については、オーストラリア統計局(ABS)のデータがかなりインターネットで検索できるので、それを利用した。また過去の新聞記事は、電子新聞システムを利用して検索、収集した。1~2ヶ月に1回程度は研究会を開催し、互いの情報交換と現地調査における問題点の抽出に努めた。

(4)共同調査対象地では、オーストラリア側の連携研究者デニス・ラムレイにコーディネートを依頼し、地元の州政府関係者による地域動向のブリーフィングや大学の研究者・スペシャリストによるデータ分析などを依頼し、全員でのディスカッションを通じて、共通の認識を高めることに努めた。また開発プロジェクトの現場等は全員で見学し、現地でのディスカッションを行った。

(5)各個別調査に際しては、州図書館や州政府機関における一次資料の収集、関係各機関での聞き取り調査、住民に対する聞き取り調査、市街地や自然生態系の観察等を行った。商店街での人の動きや文化的イベントに対しても、参与観察を行った。

(6)帰国後は資料を整理し、また研究会を通じたディスカッションを繰り返すことによって問題点を明確化し、さらなる補足調査や他都市との比較を試みた。全体セミナーには、オーストラリア側の連携研究者も招聘して行った。

(7)アジア化の影響を正しく位置づけるために、オーストラリアやニュージーランドの他の都市との比較調査も行った。またアウトプット側である中国やシンガポール・マレーシア・香港などの地域に対しても、対オーストラリア関係の動向を調査した。

4. 研究成果

以下に、各研究分担者の課題にしたがって研究成果の概要を説明するものとする。

(1)南出眞助「水陸交通結節モデルの研究」
まずオーストラリアの各港湾局(ポートオーソリティ)で公開されている統計資料を収集し、各州都に対応する大規模港でのコンテ

ナ流通についての分析を行った。その結果、日本始発・中国始発の周回航路はともに東海岸3港(プリズベン、シドニー、メルボルン)に偏っており、シンガポール始発航路の時計回り最終寄港地としてパースが位置づけられていること、ダーウィンはさらに沿岸航路の港であることなどから、3大都市優先型の結節モデルが展望できた。

つぎにダーウィン、パースその他港湾都市でのウォーターフロント地区再開発の現場を調査した。その結果、距離的にアジアに近い港湾都市であっても、国家政策レベルでのインフラ投資が行われないかぎり、アジア化への個別対応の強化が図られることはあっても、より長期的な全体ビジョンの作成には遠いことが認識できた。アジア系移民の多くが就業の機会を求めて東海岸に集中することも、州間不均衡の是正にはつながっていないと推測される。

(2) 森島 覚 「経済政策・労使関係の研究」

ダーウィン、パースに限定することなく、オーストラリア各地およびニュージーランドの労働組合を訪問し、聞き取り調査を行った。その結果、とりわけ労働者の国際性の高い航空産業の現場においては、コードシェア便の多極化に伴い客室乗務員の混成化が進行しており、またカンタスからジェットスターへの経営シフトに伴って地上勤務者にもさまざまな影響が顕在化していることが判明した。

さらにオーストラリア有数の衣料メーカーが中国への移転策を打ち出すなど、オーストラリアの工場労働者にとっても好ましくない状況が増大するなかで、労使関係の緊張が高まって来ていること、ひいては政局への影響も避けられないことも指摘しうる。

(3) 山中 雅夫 「対豪直接投資の研究」

マクロな視点からオーストラリアを軸とする二国間マネーフローの動向を概観した。オーストラリア貿易は輸出入ともに、年々アジアへの依存度を高めており、とりわけ中国の対豪直接投資の増大が、西オーストラリア州を中心とする鉱産資源の流通に大きな影響を及ぼしている。製造業においても、メルボルンを中心とする自動車メーカーおよび部品供給メーカーにおいて、中国資本の参入が注目されている。

さらにオーストラリアの外貨獲得の上位に位置する教育産業でもアジア化の影響は顕著に出ており、パースを事例にするならば、

インド人留学生の数は、中国人留学生と並ぶ最高レベルに達しており、シンガポールに近いパースの特性がヒトの動きにも反映されている。

(4) 重松 伸司 「アジア系移民社会の研究」

今回の調査では、オーストラリア北部(北部準州および西オーストラリア州北部の沿岸域)における歴史的な移民活動として、日系人による真珠産業の発展と、地域社会における日系人コミュニティの位置づけ、さらにそれらの現在への継承性や国家政策からみた再評価等について展望した。

そのために北部準州図書館および西オーストラリア州図書館で第一次史料の検索と収集につとめ、また送り出し側である日本国内の移民関係者からのヒアリングを行った。その結果、移民の「断続的な定住」によっても、地域社会にさまざまな形で貢献があり、今日のコミュニティの一環を形成していることが村落レベルで実証できた。

(5) 西川 喜朗 「観光開発と生態系の研究」

ダーウィンはオーストラリア国内では熱帯動植物の生態系が観察できる地域として国際的な観光資源となっているが、交通アクセスが不便なために、訪問者数はそれほど多くない。そのような熱帯生態系の自然は、現地の住民生活や農作業にどのような環境を提供しているのか、博物館、農業研究所等の調査を通じて行った。

さらにパースおよびクィーンズランド州ケアンズにおいても統計データの分析を含む比較調査を行い、グリーンツーリズムや日本の高校修学旅行を対象とした教育ツーリズム等の実態調査から、アジア諸国の観光客への対応が急速に進行している状況が把握できた。

(6) 筒井 由起乃 「村落社会構造の研究」

ダーウィンでは、ベトナム系移民の生活状況と地域社会の中での位置づけについて、インセンティブな調査を行った。その結果、ベトナム系移民はダーウィン周辺地区におけるアジア野菜やマンゴーの栽培において重要な役割を果たしていることが判明した。これはベトナム系移民の流入というヒトの動きに連動する、オーストラリア農業のアジア化の新たな動向として注目される。

しかもマンゴー生産の拡大は、収穫期における労働力不足など、社会的にも影響をおよ

ぼしてあり、インフラ整備の立ち遅れる北部準州において、今後の安定的な農業生産にもとづく地域社会のあり方を考えさせる重要な問題であるといえよう。

(7)金田章裕「農牧業地域の研究」

ダーウィン、パースを中心に、アジア化が進行する以前の農業集落および農業経営の実態がどのように変化しているかを個別村落レベルで調査した。ダーウィンは気候的に穀物栽培に向かず、かつてはインドネシア向け肉牛ビジネスで繁栄した時期もあったが、現在では野菜・果樹生産へと中心軸がシフトされつつある。

またパース近郊農村では、かつての小麦を中心とした単調な穀物栽培から、より国際市場価格を意識した菜種栽培等への転換が目立っており、シンガポールをはじめとするアジア巨大都市に向けての国際的供給圏ともいべき現象が進行している。パースにおけるシンガポール向け農産物輸出が増大しているのも、南出が指摘した、時計回りコンテナ航路の最終寄港地としての位置が大きく影響している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 10 件)

南出眞助、「2007年度科研パース調査の概要」、『オーストラリア研究紀要』第 34 号、15-16、2008、査読無

山中雅夫、「オーストラリア自動車市場と経営環境」、『オーストラリア研究紀要』第 34 号、17-36、2008、査読無

南出眞助、「2006年ダーウィン調査の概要」、『オーストラリア研究紀要』第 33号、59-64、2007、査読無

山中雅夫、「アジア・オーストラリア関係の拡大と深化」、『オーストラリア研究紀要』第 33 号、65-80、2007、査読無

森島覚、「オーストラリア・ニューゼalandの航空産業における労働者の現状と問題点」、『オーストラリア研究紀要』第 33 号、81-90、2007、査読無

重松伸司、「Research Note on Pearlring and Japanese Contribution to Local Society in early 20th century Australia」、『オーストラリア研究紀要』第 33 号、91-100、2007、査読無

筒井由起乃、「ノーザンテリトリーにおけるマンゴー生産」、『オーストラリア研究紀要』第 33 号、101-114、2007、査読無

西川喜朗、「オーストラリアの糞公害をおさえた糞虫の導入について」、『オーストラリア研究紀要』第 33 号、115-120、2007、査読無

南出眞助、「オーストラリア主要港におけるコンテナ輸送の動向」、『オーストラリア研究紀要』第 32 号、3-19、2006、査読無

重松伸司、「CEPEA: Is It Possible to Organize Asia-Oceanic Community?」、『オーストラリア研究紀要』第 32 号、21-28、2006、査読無

[学会発表](計 1 件)

南出眞助、「オーストラリア主要港におけるコンテナ輸送の動向」、オーストラリア学会全国研究大会、2006 年 6 月。於国立民族学博物館。

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

[その他]

追手門学院大学オーストラリア研究所HP

<http://www.otemon.ac.jp/cas/>

および 追手門学院大学附属図書館オーストラリア・ライブラリーHP内「オーストラリア論文データベース」

http://www.oulib.otemon.ac.jp/aus/aus_db_top.htmlにて『オーストラリア研究紀要』の閲覧可能

6. 研究組織

(1)研究代表者

南出 眞助 (MINAMIDE SHINSUKE)

追手門学院大学・国際教養学部・教授

研究者番号：8 0 1 1 1 9 0 4

(2)研究分担者

森島 覚 (MORISHIMA AKIRA)

追手門学院大学・経済学部・准教授

研究者番号：8 0 2 7 8 5 9 8

山中 雅夫 (YAMANAKA MASAO)

追手門学院大学・経営学部・教授

研究者番号：2 0 0 7 9 3 4 6

重松 伸司 (SHIGEMATSU SHINJI)

追手門学院大学・国際教養学部・教授

研究者番号：2 0 1 0 9 2 4 2

西川 喜朗 (NISHIKAWA YOSHIKI)

追手門学院大学・心理学部・教授

研究者番号：9 0 0 7 9 3 8 5

筒井 由起乃 (TSUTSUI YUKINO)

追手門学院大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：10368188
金田 章裕 (KINDA AKIHIRO)
京都大学・大学院文学研究科・名誉教授
研究者番号：60093233

(3)連携研究者

平成18～20年度：デニス・ラムレイ Professor
Dennis Rumley (西オーストラリア大学教授、
のちにエディス・カウエン大学教授、インド
洋研究グループ所長)